若越郷土研究　六十一巻二号

越前（福井）藩の戊辰戦争戦没者の墓碑を訪ねて

南川傳憲

はじめに

ペリーの来航により長く続いた日本の鎖国は終わり、次第に武力抗争が継続する幕末動乱の時代へと突入していった。歴史上の事件（変）を拾い上げてみると、

・水戸脱藩士による桜田門外の変（安政七年〈一八六〇〉）。幕府の権威失落。
・生麦事件（文久二年〈一八六二〉）から薩英戦争（文久三年）。薩摩藩の敗北。
・八・一八の政変（文久三年）。長州藩が京都を追われる。
・禁門の変（元治元年〈一八六四〉）。長州藩と越前藩などで戦闘。長州藩再び朝敵となる。
・下関戦争（元治元年）。長州藩の敗北。
・将軍徳川家茂急逝（慶応二年〈一八六五〉七月二十日）
・薩長同盟（慶応二年一月二十一日）
・第二次長州戦争（慶応二年）。幕府軍各地で敗北。
・孝明天皇崩御（慶応二年）。会津藩をはじめとする公武合体が頓挫。幼帝をかかえる討幕派が主導権を握る。
・大政奉還（慶応三年）
・鳥羽伏見の戦（慶応四年）。戊辰戦争の始まり。幕府・会津藩勢力より軍事力で圧倒する薩摩・長州藩が新政府軍の基盤を固め、官軍（新政府軍、西軍）となる。

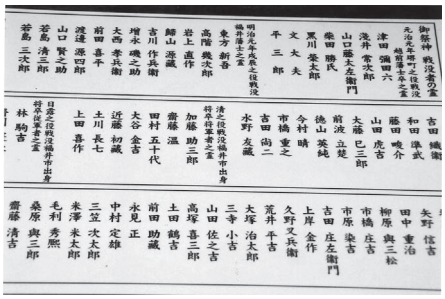
今回の越前（福井）藩の戊辰戦争戦没者の墓碑を訪ねる旅は、戊辰戦争の前哨戦になった禁門の変の戦没者が祀られている福井市足羽山の招魂社から始めたいと思う。

一　足羽山招魂社

福井市には大宮に福井県護国神社（昭和十六年社殿竣工）と足羽山に招魂社がある。京都堺町禁門の変と戊辰戦争の戦没者を慰霊している足羽山招魂社の由緒書を紹介したい。

元治元年（一八六四）京都堺町禁門の変にたおれた福井藩士七名ならびに、明治元年（一八六八）戊辰の役殉難者十二名（表1）を慰めるため、明治三年九月にこの地に墓碑を建て、招魂場と呼んで旧福井藩軍務寮がこれを守護してきた。

明治六年七月旧藩主松平慶永（春嶽）・茂昭両公などが建議して御社殿を造営。同年九月十二日前記十九柱を合祀して招魂社と称することとなった。



図一　合祀者の額の一部

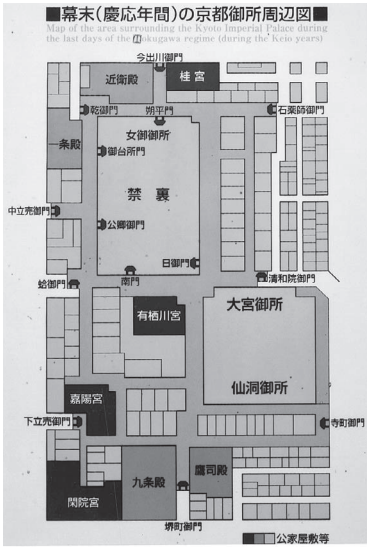
その後西南の役、日清・日露戦争の国事殉難者をも合祀し市民の崇敬いよいよ篤く明治三十四年に官祭招魂社、昭和十四年には足羽山護国神社と称したが、さらに大東亜戦争における戦没者（六九四四）柱の霊を合祀し、昭和三十六年十二月、現在の足羽山招魂社に改められた。（以下略）

従って、足羽山招魂社にはいわゆる戊辰戦争の前哨戦であった京都堺町禁門の変の戦没者から合祀されている数少ないケースであるが、ここは神社であるため、境内に墓地はない。

二　京都御苑（堺町御門）

著者は、平成二十八年一月京都御苑の一部にある堺町御門を訪ねてみた。京都二条城から堀川を越え、福井藩邸（改装中の京都国際ホテル）があった橋本左内碑を見ながら二条通りを散策した。昔ながらの町屋が立ち並ぶ中を東に進むと、烏丸の大通りに出る。そこを北に進むと森と御門に囲まれた京都御苑に行き当たる。烏丸丸太町交差点を右折して百メートル程進むと、目的とする堺町御門が左手に見える。

堺町御門は堺町通りに面しており、昔は現在より奥まった位置（北）に御門があったとされている。



図二　京都御苑の各御門

ここは、元治元年（一八六四）七月十六日、天龍寺などに布陣していた長州藩により蛤御門、中・下立売御門、堺町御門へと進軍・襲撃された御門の一つで、蛤御門に次いで激戦地であったとされている。堺町御門を警備していた越前藩と長州藩真木隊との間で戦闘になり、越前藩に七名の戦死者を出すことになった。越前藩では警備していた御門の名前をとり京都堺町禁門の変と称しているが、激戦地であった蛤御門に因んで蛤御門の変または禁門の変と言われることも多い。

堺町御門から蛤御門まで御苑内を歩いてみたが、かなりの道のりを感じた。

京都市民は自転車で移動したり、御苑の管理者は電気自動車で筆者のそばを走り抜けていった。御苑の中には、京都御所や仙洞御所があり、皇族や公家の住居跡地や異様に成長した木々の大きさを見ながら、京都遷都一二一八年の歴史の重さを感じた。

図三　堺町御門

その後、長州藩は、御所に発砲した朝敵の汚名を着せられて、八月十八日の世変に続いて再び京都を追われることになった。

禁門の変の四年後、鳥羽伏見の戦いが勃発し、その後、戦場が東京、越後、会津、東北を経て明治二年三月に箱館で終結するまでの二年間国内戦が続いた。

新政府軍は錦の御旗を基に西軍または時には官軍とも呼ばれ、旧幕府軍は東軍から次第に賊軍となっていった。

慶応四年（一八六八）四月一日江戸城が無血開城された後も、五月三日には「奥羽越列藩同盟」が成立した。『福井県史』によると、越前藩が再び戊辰戦争に関わるようになったのは、会津征討のため越後口に出兵を命じられ、六月二十四日から二十六日にかけて総勢一二〇〇人、さらに七月四日に六小隊を長岡藩征討に投入した時からである。

しかし、七月二十九日には長岡城（現ＪＲ長岡駅付近）が再び西軍に奪還され、北越戦争も終わりに近づいていた。

この北越・会津戦争では、長岡藩の河井継之助の活躍や会津藩白虎隊の悲話はあまりにも有名であるが、越前藩兵の活躍も忘れてはならない。

三　新潟県護国神社

新潟市は信濃川と阿賀野川の堆積地に発達した地で、江戸時代西廻り航路の寄港地の一つであった。戊辰戦争では長岡藩や会津藩の武器弾薬の補給基地となり、西軍をおおいに苦しめた。

慶応四年七月二十五日西軍が千名に及び兵士を海路より阿賀野川河口（現新潟市松浜一丁目）の右岸に広がる松ヶ埼に上陸させ、

二十九日までの五日間、対する東軍（米沢、会津、庄内）との間で激戦が繰り広げられ多くの兵が戦死した。

次に著者が訪ねたのは、新潟市西船見町にある新潟県護国神社である。

一の鳥居をくぐって参道を進むと、左手の松林の中に「戊辰役殉難者墓苑」の石柱と「戊辰新潟戦争」の説明文がある。

『新潟県護国神社』由緒によると、

明治元年十月二十九日、新潟市常盤ケ岡（現新潟市中央区旭町一番町、新潟大学医学部）に「招魂社」を祀り、明治維新の国事に殉難したご英霊の慰霊祭を行った。明治八年「新潟招魂社」、明治三十四年官祭社「新潟招魂社」となり、昭和十四年に「新潟縣護國神社」となった。昭和二十年五月、現在地に「新潟縣護國神社」を創建した。

その後昭和六十年に旧新潟大学本部跡地（元招魂社跡）から東軍のものと思われる九十二体の遺骨が発見されたので、「戊辰役殉難者墓苑」に埋葬し、二度目の戊辰の年にあたる昭和六十三年（一九八八）に、多くの方々の協力により東軍の慰霊碑を建立した。

この「戊辰役殉難者墓苑」に一歩足を踏み入れると明治元年や二年の石塔（灯籠）があるかと思えば、大正四年建立の「戊辰薩藩戦死者墓」（平成二年十一月修復）や、真新しい「御親兵十津川隊戊辰役戦没者招魂碑」（昭和三十二年四月）、「戊辰役東軍慰霊碑」（昭和六十三年）、平成十二年三月に建立した「大洲藩船殉難者慰霊」の碑まである。さらに「戊辰役殉難者墓苑」の右手奥には「新潟県満州開拓殉難者」の碑があり、まるで墓碑の資料館の様相を呈していた。また、ある資料によると、「東軍と西軍、敵味方を同じ場所に埋葬した珍しい墓苑である」と書かれていた。事実に相違はないが、これは昭和の産物であることを肝に銘じたい。

「戊辰役殉難者墓苑」で、越前藩の墓碑十基にはじめて出会えた。しかし、残念なことに、碑面にあるべき埋葬者の文字が十基とも削

図四　戊辰役殉難者墓苑

図五　越前藩の墓碑全景

り取られ、越前藩の名前を残すだけであった。唯一埋葬者が特定できる墓碑は部分的に「・・休高命　三十五歳」が残されていた「前田喜平休高命」の一基のみであった。

①新潟護国神社「戊辰役殉難者墓苑」の墓碑はなぜ十基か

『福井県史 通史編』では、明治政府が編纂した『復古記』を引用して、越前藩の戦死者は十名としている。しかし、足羽山招魂社の記録（表2）では銃創などが原因でその後死亡（明治二年二月に柏崎と三年三月に本籍）した二名を加えると戦死者が十二名になる。

従って、越前藩の戊辰役戦没者碑は明治元～二年の初めに計画され建立された可能性が考えられた。また、「戊辰役殉難者墓苑」の埋葬者は足羽山招魂社に合祀された表2のうち、その後死亡した二名を除いた十名と推定される。

②新潟護国神社の越前藩士の墓碑面は「越前藩」名だけ残して何故削り取られたか

・墓碑の破損や焼跡がないので、天変地変などによるものとは考えにくい。

図六　休高碑

・碑面は、人工的にノミの様なもので、丁寧に少しずつ削り取ったように見える。

このような状況と不慮の死の場合丁寧に祀らないと祟りがあるという「御霊《ごりょう》信仰」から考えると、足羽山招魂場が明治三年九月に建立された明治二年から三年の間に戊辰戦争がもとで亡くなった二名を加えた計十二名を新たに足羽山招魂場に祀り直し、新潟の招魂社墓碑の英霊を改葬した可能性が考えられた。

墓碑のお霊抜き（御霊改め）をした後、碑面を削り単なる石碑としたが、越前藩所有の碑であることを明らかにするため、藩名を残したと推論した。なお、詳細は今後の調査を待ちたい。

③墓碑頭部の形状が三角形である

明治初年頃の墓石は板状または柱状で、頭部が丸みを帯びたかまぼこ形か方錐形が多い。頭部が三角形の形状をしている墓碑は非常に珍しく、「戊辰役殉難者墓苑」では越前藩の墓碑のみであった。

なお、小田康徳他によると、その後戦没者墓碑の形状は、明治七年（一八七四）十月には、陸軍省が「陸軍埋没地ニ葬ルノ法則」を公布して、四角柱に頭部が方錐形と指導したが、遺族の意向もあって徹底されなかったようである。

④神式か仏式か

越前藩の墓碑は「・・・命」の文字が残されているので神式で、西軍または松平家が建立したと推論して支障がないと考えた。

ところで、戊辰戦争における越前藩の戦没者は何名であったのか。

表１　堺町禁門の変福井藩埋葬者一覧

神名（被葬者）	藩　名	合祀年月日	戦死事故	足羽山招魂社	埋葬地
津田弥六太橘正順命	福井藩	明治六年十月十二日私祭	元治元甲子年七月十九日京師堺町役ニ於テ銃丸ニ由り死ス。齢48才	○	
浅井常次郎直命	福井藩	同	同断、齢25才	○	
山口藤太左衛門保儀命	福井藩	同	同年同月同日同所ニ於テ銃丸ニ由リ八月三日同所岡崎屋敷ニ於テ傷死ス　齢40才	○	
柴田勝氏命	福井藩	同	同年同月同日同所ニ於テ銃丸ニ由リ同日岡崎屋敷ニ於テ傷死ス　齢41才	○	
黒川栄太郎橘正澄命	福井藩	同	同断　齢19才	○	
文太夫命	福井藩	同	同年同月同日同所ニ於テ銃丸ニ由リテ死ス	○	
平三郎命	福井藩	同	同断	○	

（族籍・身分は略）

表２　戊辰戦争越前藩埋葬者一覧

神名（被葬者）	所属年齢	戦死年月日など	足羽山招魂社合祀年月日（12柱）	足羽山招魂社以外の埋葬地	戦死地
東方新吾金秋命	福井藩50歳	明治元年7月25日越后国三島郡輿板ニ於テ負傷同2年2月15日柏崎ニテ死ス	明治6年10月12日鎮祭明治8年4月24日　官祭		越後赤谷で戦闘。幾次郎ら3名も重傷、後に没
高階幾次郎原在庸久命	福井藩32歳	同年8月11日越后国蒲原郡小松ニ於テ銃丸ニ由リ同3年3月4日本籍ニテ傷死ス	同		
若嶋清三郎命	福井藩23歳	同年8月13日越后国蒲原郡小松村ニ於テ銃創ヲ被リ同月14日五泉病院ニテ死ス	同		
岩上直作朝道命	福井藩22歳	同年9月1日越后国岩船郡岩石村後山上ニ於テ戦死ス	同		
吉川作兵衛信勝命	福井藩32歳	同年9月1日越后国岩船郡高畑山ニ於テ戦死ス	同		
若嶋三次郎命	福井藩22歳	同年9月4日奥州下河合村ニ於テ銃創ヲ被リ同月29日新潟病院ニテ死ス	同		
増永磯之助休晴命	福井藩34歳	同年9月11日陸奥国河沼郡熊倉村ニ於テ戦死ス	同	会津坂下町光照寺	熊倉付近で激戦。大西ら5名戦死（熊倉）
大西孝左衛勝行命	福井藩31歳	同断	同	会津坂下町光照寺	
前田喜平休高命	福井藩35歳	同断	同	新潟護国神社（他9柱）	
山口賢之助賢好命	福井藩18歳	同年9月11日陸奥国河沼郡津川口熊倉村ニ於テ銃創ヲ被り同年10月5日新潟病院ニテ死ス	同		
渡辺源四郎元孝命	福井藩32歳	同年9月11日同所ニ於テ戦死ス	同	会津坂下町光照寺	
森　栄之助	福井藩24歳	明治元年9月13日越後板屋沢村で戦死		村上市勝木共同墓地	越後板屋沢村で戦死
新　助	深見村30歳	明治元年9月24日越後板屋沢村で戦死		村上市勝木共同墓地	
福井藩戦死墓3基	福井藩	3名とも戒名のみで記載。被葬者不明		村上市勝木共同墓地	
歸山源蔵則章命	福井藩45歳	同年10月1日出羽国田河郡鼠ケ関ニ於テ戦死ス	同		鼠ケ関で戦死
八木　三郎	福井藩21歳	明治元年秋会津で戦死		会津若松市東明寺	融通寺境内鶴ヶ城包囲戦の戦死者（?）

戦死者：復古記10名、戊辰戦争　新人物往来社　2034人中15名の記述あり（族籍・身分は略）

『復古記』と足羽山招魂社の記録でも異なり、三百藩戊辰戦争事典では、一説によると二千三十四名出征して、戦死者が二十三名、負傷者が三十二名の記録があるとしている。この越後、会津地域には未調査の越前藩戦没者の墓碑が残されている可能性があると考え、さらに調査を進めた。

四　新潟県村上市勝木《がつぎ》共同墓地

『福井県史』によると、越前藩の一軍は庄内に進撃し、特に鼠ケ関口（現山形県鶴岡市、新潟県の県境）では激しい戦いを繰り広げたと記しているので、鼠ケ関の西軍本陣があった勝木を訪ねた。

新潟から羽越本線の各駅停車の電車に乗り、二時間程で勝木駅に到着した。駅の裏手には大型の地域医療総合病院があり、地区の人々は駅構内を通って通院しているようであった。訪問した平成二十六年十一月十四日は風雨が強く、駅前の長濱旅館で勝木共同墓地の場所を聞いた。国道七号線を越え、幼稚園を左に見ながら、駅から一〇分ほどの小高い丘に共同墓地はあった。まず戊辰戦争受難者墓所の案内碑文から紹介したい。

戊辰戦争は慶応四年一月に始まり、凡そ九ケ月で終わったが、戦域が越後、庄内の国境に及ぶやここ勝木は西軍の鼠ケ関開戦基地となり、西軍幹部は当地に止宿して指揮をとった。そのため明治元年九月上旬より下旬に至る中浜方面の戦死者は護送され勝木共同墓地の一画に埋葬された。土州六基、加州三基、越前五基十四基である。

（後略）平成十八年三月吉日　魅力ある勝木集落つくり委員会

勝木共同墓地の一番高いところに、改葬された戊辰戦争戦没者の墓地が二カ所に分かれて大切に保存されていた。越前藩の墓地はコの字型の入口に近いところに

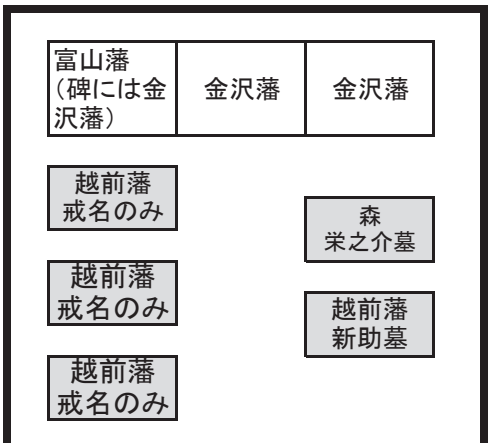
新助　□□　深見村（新潟県魚沼郡にあった村）の農　明治元年九月二十四日越後板屋沢村（現新潟県村上市）で戦死　三十歳

森栄之助　明治元年九月十三日越後板屋沢村で戦死　二十歳

戒名のみで、越前藩とされているのみで、被葬者の特定できない墓碑が三基あった。

先に訪れた「戊辰役殉難者墓苑」でも、「戊辰薩藩戦死者墓」に農民兵と思われる多くの戦死者が陶板に名前が残されていた。勝木墓地にもほんの一部と思われるが、農民兵が戊辰戦争で戦死した記録が残されていた。

また、森栄之助は初めて接する戦没者名であり、かつ戒名のみで埋葬された三



図七　勝木共同墓地　越前藩見取り図

図八　勝木共同墓地　越前藩墓碑

基は被葬者が特定できず残念である。これらの墓碑は鼠ケ関で戦死した歸山源蔵則章（表2）とは異なり、関係者により仏式で埋葬された可能性が高いと考えられる。

五　福島県河沼郡会津坂下光照寺

『三百藩戊辰戦争事典』によると、九月十日、越前藩は会津へ進撃となり、翌十一日、熊倉（現福島県喜多方市）付近の激しい銃撃戦で栃屋隊の大西孝左エ門ら五名が戦死した。これは会津藩が降伏する十一日前のことであった。

この熊倉がある喜多方市と西軍の本陣があった会津坂下は阿賀野川の福島県側である阿賀川を挟んで約十キロ余りの距離にある。

ＪＲ只見線の会津坂下の駅を降りて少し歩くと、名歌手の春日八郎のモニュメントがあった。さらにまっすぐ進むと会津坂下町の中心部に出て、町役場の近くに光照寺があった。庫裡の横に一段と高くなったところに戊辰戦争戦没者六人墓があった。ここは越前藩（増永磯之助、大西孝左衛、渡辺源四郎、熊倉で戦死）と高田藩（松井勝之助、新村巳代治、高橋源四郎　若松で戦死）の合同墓で、越前藩と高田藩とは次の様な姻戚関係にある。

図九　会津坂下光照寺越前藩合葬墓碑

元和九年（一六二〇）に松平忠直の不行跡により、忠直の弟で越後高田藩主であった松平忠昌を福井へ転封し、忠直の嫡子で越前藩主の松平光長を越後高田藩へ移封した経緯がある。

このような関係から両藩の合同墓になり、会津戦争の戦後処理も両藩に任されたものと考えられた。

六　会津東明寺西軍（官軍）墓地

さて、会津戦争の終焉の地、会津若松市を訪ねることにした。JR会津若松駅の観光案内所で、戊辰戦争の墓地の場所を確認した。「お客様は西軍関係者ですか、それとも東軍関係者をお探しですか」と聞かれ、「西軍墓地はまちなか周遊バスのハイカラさんに乗って、次の停留所の会津町方伝承館で下車して下さい。そこに西軍墓地があります」と教えられた。

図十　会津東明寺西軍（官軍）墓地にある越前藩の墓碑

会津町方伝承館のある交差点の脇に戊辰戦役西軍戦没者墓地の案内版があった（平成二十七年十一月に訪問した際にはこの看板はなかった）。

（略）明治二年四月現在の墓地が建てられてからは県の招魂社で管理をし祭礼をしてきたが、今次大戦後は官修墓地の制もなくなったので、西軍墳墓史跡保存会が年々祭礼を行ってきている。ここに祀られている各藩戦没者は次の通りである。

土佐藩　四十九人　　薩摩藩　三十三人
長州藩　二十四人　　大垣藩　二十人
肥州藩　十一人　　備州藩　六人
岡山藩　三人　　館林藩　二人
越前藩　一人　　藩籍不明　一人

『歴史読本シリーズ　幕末維新シリーズ②』によると、この西軍墓地の埋葬者は鶴ヶ城の包囲戦での戦死者とされている。しかし、越前藩がこの包囲戦に参画した明確な記録は確認できなかった。

この改葬された墓地に埋葬されている

八木三郎墓　福井藩　明治元年秋　会津で戦死。二十一歳

は、どのような方なのか漠然とした墓碑銘だけでは判断し難いが、戦死の年月日が刻まれていないので、戦乱に紛れた行方不明者として供養されたのではないかと考えられる。

九月十四日なると、会津戦争も終結して福井藩兵は会津駐留の六小隊を除き、同年十一月に帰藩した。なお、越前藩と高田藩は新政府から会津戦争の戦後処理を任されたが、占領軍監察方兼断獄の筆

頭頭取越前藩士久保村文四郎は東軍戦死者の埋葬の不手際により、離任後の帰路で会津藩士によって暗殺されている。

おわりに

大正九年に行われた戊辰戦争五十年祭で、南部藩の上級武士の家に生まれた原敬は「日本国には朝敵などは存在しない。あの戦争は見解の相違で起こったものである」と言っているが、薩長（天皇）中心の政治が明治・大正・昭和と続いて、見解の相違では済まされないほど大きな犠牲が払われてきた。また、お家存続のために東軍・西軍の両方に出兵した郡上八幡藩まであった。その中で、徳川幕府の親藩であった越前藩は会津藩の様な大きな犠牲を出さずに済み、その間の舵取りは並大抵ではなかったと思われる。

今回紹介した戊辰戦争戦没者墓地はほとんど改葬されており、その案内板にも平和な時代に建てられた感覚が感じ取られる。また、紹介した墓碑はいずれも屋外に建立されていたので、そのうち摩滅・破損する日もそう遠くはないと思われる。その中でも、新潟県護国神社「戊辰役殉難者墓苑」で見た「戊辰薩藩戦死者墓」（平成二年十一月修復）では、農兵一人に至るまで戦死者名を陶板に焼きこみ長く英霊に特別の配慮をした努力がみられた。とても心うたれる思いである。

註

（1）南川傳憲「越前大野藩関係者の箱館戦争戦没者の墓碑を訪ねて（二）」（『若越郷土研究』五九巻一号、二〇一四年）。
（2）『歴史人』第五巻第十二号（二〇一四年）。
（3）星亮一・戊辰戦争研究会編『戊辰戦争を歩く―幕末維新歴史探訪の旅』（光人社、二〇一〇年）。
（4）『京都時代ＭＡＰ　幕末・維新編』（光村推古書院、二〇〇三年）。
（5）教育課社寺係編『官祭招魂社　官修墳墓明細帳』（大正四年。福井県立図書館蔵）。
（6）『福井県史 通史編5近現代』（福井県、一九九四年）。
（7）『三百藩戊辰戦争事典 上』（新人物往来社、二〇〇〇年）。
（8）加藤貞仁『戊辰戦争とうほく紀行』（無明舎出版、一九九九年）。
（9）『別冊歴史読本増刊　歴史読本シリーズ　幕末維新シリーズ②　戊辰戦争』（新人物往来社、一九九三年）。
（10）小田康徳ほか編著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）。
（11）佐々木克『戊辰戦争―敗者の明治維新（中央新書）』（中央公論社、一九七七年）。